

【2018年5月30日発行】

THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES

日本国際文化学会ニュースレター39号

<http://jsics.org/>

日本国際文化学会事務局

多摩大学
グローバルスタディーズ学部事務室内
〒252-0805
神奈川県藤沢市円行802番地
Tel: 0466-82-4141
Fax: 0466-82-5070
Email: jsics@gr.tama.ac.jp

2018年度 第17回全国大会

「知の再武装——人は何をするべきか——」のお誘い

大会実行委員長 安田 震一



学会員の皆さん、こんには。この度、2018年度日本国際文化学会第17回全国大会を多摩大学グローバルスタディーズ学部(湘南キャンパス)にて開催させていただきました。2016年度の早稲田大学、昨年度の宮崎公立大学に続き、全国大会開催校として選んでくださったことを大変名誉に思い、皆

さまに感謝しております。大きな責務も感じてはおりますが、皆さまのご協力のもと、心に残る全国大会にできれば幸甚でございます。

多摩大学は1989年に創立し、国際性・学際性・実際性の3つのキーワードを建学の理念として展開してきました。1993年に大学院、そして2007年にグローバルスタディーズ学部が設立され、現在は2学部と1大学院からなる教育機関です。湘南キャンパスは、少人数制授業、教員と学生の距離が近いという特徴を持った、手作り感溢れるキャンパスです。

本学部では、1年次にAcademic English Program (AEP)、2年次からはホスピタリティ・マネージメント・コースとインターナショナルスタディーズ・コースに分かれます。その後、卒業までに実社会で通用する問題解決思考力を身に着けた上で、観光・サービス産業・国際物流・国際機関・外資系企業など、グローカル人材として活躍できる教育を行っております。目を世界に向けた学部でございますので全教員の三分の一は英語のネイティブスピーカー、日本人教員であっても海外の大学における学位取得者を多数配置しております。

また、地元密着型の学部として、地域問題の解決を通じた地元の発展および活性化への参画を心掛けております。今後は、藤沢市の友好姉妹都市提携を軸に、海外との交流をさらに促進・拡大させることで、海外へ発信する学部を目指す所存です。学生には留学を推奨し、海外で得た知識、およびその体験で養った自信を基に社会に貢献してほしいと考えてお

ります。一方で、姉妹都市にある大学からは、本学部へ積極的に留学して頂くように一段と働きかけています。寺島学長が提示する「移動は人を賢くする、賢くなると進歩がある」という理念のもと、文化の違いを乗り越えて「歩み寄る」ことができるような次世代の若者を輩出するよう、日々尽力しております。

今回の全国大会では、6件の共通論題、そして嬉しいことに36件と多くの自由論題の発表が予定されております。過去の全国大会と比べて多くの応募を頂いた自由論題のセッション構成に関しては、若手研究者の育成を考慮しつつキーワードに基づく振り分けさせて頂きました。振り分けに関しては、別のセッションに配置してもらいたいという発表者もいらっしゃるかもしれません、何卒ご了承くださいませ。

本学の寺島実郎学長は「100歳人生」を生き抜くための「ジエロントロジー」(高齢化社会工学)を提唱しています。この問いを考えるために、「知の再武装」を無視できません。また、IT(情報技術)の急速な進化によりAI(人工知能)が今後私達の生活に一段と深く関わってくることは明らかです。したがって、人間の寿命が延びる一方で、AIによって職を奪われるのではないかという危機感を感じる時代に突入することは間違ひありません。

私たちは、「知の再武装」にあたり、何がいつ・どこで必要となってくるのかを考えなくてはなりません。また、「人にしかできないこと」「生きる力」という根源的な問いを模索する必要があります。今回の全国大会では、こうした点を議論して頂く場としたいと考えています。

寺島学長の基調講演を踏まえて、パネル・ディスカッションでは、「AI時代に備えるために」をテーマに3名のパネリストに討論していただきます。今後我々にできること、すること、AIにはできないことなどについてヒントが得られることを期待しております。

最後に、皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げております。そして大会実行委員長という大任の名に恥じぬよう、大会を成功させるために精進して参る所存でございます。是非とも皆さまのご指導、ご支援、忌憚のないご助言等を頂戴できますよう、よろしくお願ひ申し上げます。湘南キャンパスにてお待ち申し上げます。

全国大会 日程 7月7日（土）

テーマ	プログラム
09:00	受付・手荷物預かり（アゴラ）
【10:00～12:00】	自由論題 A～D
自由論題A 戦争、反戦、テロリズム 桐谷多恵子（長崎大学） (E 202)	「焼かれた身体」と「焼いた身体」にまつわる受苦のイメージ－焼身行為における苦痛と原爆の苦痛の連関－ 阿部碧（一橋大学社会学研究科総合社会科学専攻博士後期課程）
	民主化後のインドネシアのテロリズム－アルカイダ、IS（イスラミック・ステート）と国内テロ組織への影響に関する考察 大形利之（東海大学国際文化学部国際コミュニケーション学科教授）
	グローバル授業で学ぶ「戦争」・「大規模暴力」・「記憶」・「和解」－Topics of Modern and Contemporary Historyにおける授業実践の経験から－ 中野聰（一橋大学大学院社会学研究科教授・一橋大学副学長）
	非核都市宣言をめぐる地方的展開－福岡県内の自治体を事例に 大和裕美子（九州共立大学経済学部講師）
自由論題B 異文化の理解と交流 斎川貴嗣（高崎経済大学） (E 204)	駐日外交団付通訳官とその日米交流ネットワーク－「加藤冬作関係資料」を中心に－ 飯森明子（早稲田大学アジア太平洋特別センター員）
	岡千仞の清国認識の再検討 関秋君（東北大学大学院博士後期課程2年）
	隋唐代中国の外国人僧侶像からみる文化交流のあり方 王媛（多摩大学非常勤講師）
	戦時下の日独文化交流－日独合作映画『國民の誓』を例に 中川拓哉（名古屋大学大学院人文学研究科博士候補研究員）
自由論題C 文学から見る 文化と思想 菅野敦志（名桜大学） (E 206)	梁啓超と「今文学」運動～清代学術思想の流れについて 王佳超（龍谷大学国際文化研究科修士2回生）
	ウィリアム・モ里斯と「社会主義の宗教」－柳宗悦の民藝思想との比較に向けて－ 島貴悟（東北大学大学院国際文化研究科博士前期課程）
	1980年代中国における「ハイク・ムーブメント」 菅野敦志（名桜大学国際学群上級准教授）
	堀辰雄『大和路・信濃路』の半跏惟像の表象に見る普遍文化的特性－マルセル・プルースト受容との関連において－ 高橋梓（近畿大学専任講師）
自由論題D 歴史を記憶し現代に 生かす試み 倉真一（宮崎公立大学） (E 208)	インパール作戦における旧帝国陸軍との接触の記憶と語り継ぎ－インド北東部ナガの事例 太田哲（多摩大学グローバルスタディーズ学部准教授）
	歴史実践としての朝鮮通信使関連文化事業－韓国側の取り組みに見る－ 山口祐香（九州大学大学院地球社会統合科学府博士課程）
	藤澤湘南地域の戦争を振り返る－アクティブラーニングと地域連携を通じた新たな歴史遺産創造の可能性 藤田賀久（多摩大学グローバルスタディーズ学部非常勤講師）
	スイスのラジオ戦争－J.R.フォン・ザーリスのニュース番組「世界クロニクル」を軸に－ 葉柳和則（長崎大学教授）
12:00	昼食・お弁当引き渡し（アゴラ）
12:10～13:00	常任理事会・理事会（W203）
13:00～ 15:00	共通論題①～③
共通論題① 文化触变論の適用可能性と理論的拡張の試み－アフリカ、東南アジア、21世紀 代表者：馬場孝（E 202）	
「総論と問題提起」馬場孝（静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科教授）	
「アフリカへの適用とモデルの修正」松田素二（京都大学大学院文学研究科教授）	

「近代ベトナムへの適用と分析」岡田建志（静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科教授）
「21世紀の文化触変－理論的モデルの模索」加藤裕治（静岡文化芸術大学文化政策学部文化政策学科教授）
共通論題② スポーツと国民意識の形成—明治神宮競技大会、東亜競技大会、1940年の東京五輪を手がかりに 代表者：鈴村裕輔 (E204)
「企画の趣旨と発表の概要」鈴村裕輔（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）
「第9回極東選手権競技大会（1930年）における英領インド選手団代表旗問題」（仮題） 富田幸祐（一橋大学大学院博士後期課程）
「諸国民の祭典としての東亜競技大会」（鈴村裕輔）
「メディア・オリンピック」としての1940年東京五輪」（仮題） 浜田幸絵（島根大学法文学部准教授）
共通論題③ 「二重排除」を生きる「弱者」たち－女性・高齢者をめぐる「排除」の文化・社会的構造の分析 代表者：相原征代 総評：吉岡剛彦（佐賀大学） (E208)
「二重排除」される腐女子たち－「異性愛」と「腐女子」の立場 吳静凡（お茶の水女子大学大学院人間発達科学専攻 博士1年）
「二重排除」される高齢者たち－「若さ」と「健常」の社会学的意味とは 中山佳子（名古屋大学大学院人文学研究科人文学専攻 博士1年）
恋愛「できない」女－「恋愛できない」体质の社会学的意味とは 久保実希（岐阜大学応用生物科学部2年）
「二重排除」される既婚女性－「労働のパラドックス」に関するインタビュー調査から 相原征代（岐阜大学特別協力研究員）
15:30～17:00 基調講演 寺島実郎（多摩大学学長） 「知の再武装一人は何をするべきか」 (E301)
17:00～18:00 パネル・ディスカッション 中野聰（一橋大学副学長）、鳥飼常任理事、山脇常任理事 (E301)
18:30～ 情報交換会（カフェテリア）

7月8日(日)

08:00～ 受付・手荷物預かり（アゴラ）	
09:00～11:00 自由論題E～	
自由論題E	タルコフスキ映画『鏡』は自伝であるのか－「映像のナラトロジー」で読み解く作品構造 原友理枝（法政大学大学院国際文化研究科国際文化専攻修士1年）
画像・映像による文化理解 安田震一（多摩大学） (E202)	風刺画描写における表現様式の模倣と応用－Review of Reviewsとアメリカ合衆国諸誌にみられる風刺画家の「知」の交流－（仮題）深松亮太（神奈川工科大学非常勤講師） 近世の娯楽の文化における天正カルタ－近世初期風俗画を中心に マスキオ・パオラ（法政大学大学院国際日本学インスティテュート文学専攻博士後期課程） 日本映画界における鈴木清順－「周縁」にあり続けた監督 閔愛善（早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員）
自由論題F	大学生が観光まちづくりに参画するSTU-RISMプランニング手法について 斎藤理（山口県立大学国際文化学部教授）
ツーリズムの創出と可能性 太田哲（多摩大学） (E204)	キリスト教関連遺産が観光資源になるとき－長崎県平戸島を例に デラコルダ川島ティンカ（広島大学講師） 越境する文化や景観の観光利用－イギリス・コーンウォールとメキシコ・イダルゴの事例より 堂下恵（多摩大学グローバルスタディーズ学部教授） 濟州4.3事件をめぐるダークツーリズムの生成と観光経験 韓準祐（多摩大学グローバルスタディーズ学部専任講師）
自由論題G	現代韓国社会の民主性についての考察－民衆歌謡歌手の創作活動現場を通じて－ 齋藤紘（名古屋外国語大学助教）

自由論題G 現代アジアへの視座 菅野敦志（名桜大学） (E206)	日中観光ビジネスにおけるリスク管理の諸相－中国広州市の日系旅行社を例として 田中孝枝（多摩大学グローバルスタディーズ学部専任講師）
	インドネシアのアブラヤシ農園におけるニアス人労働者－サバルタン論の観点から 中島成久（法政大学国際文化学部教授）
	現代日本における東南アジア表象－バラエティ番組における分析から－ 齋藤大輔（青山学院大学地球社会共生学部助教）
自由論題H マイノリティへの視座 山脇千賀子（文教大学） (E208)	シンガポールにおける47年ぶりのマレー人大統領の誕生に関する論議について－「マイノリティへの配慮」に対するマイノリティ側の反応－ 市岡卓（法政大学大学院国際文化研究科博士後期課程修了）
	在欧トルコ人の参政権－欧州ポピュリズムとトルコ権威主義の衝突 櫻井幸男（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科博士後期課程）
	日本の多文化社会に見る「音」とナショナリズムの問題－ヘイト・スピーチの現場から 武市一成（拓殖大学外国語学部講師）
	『台湾日日新報』にみる沖縄県系人の文芸活動 照屋理（名桜大学国際学群上級准教授）
自由論題I 理論的考察 牧田東一（桜美林大学） (W203)	戦後日本における「国益」概念の淵源－"national interest"の受容をめぐる翻訳論的考察－ 大山貴稔（東京福祉大学国際交流センター特任助教）
	人類史上1%未満の国民国家？－アザー・ガットとシニシャ・マレシェヴィッチの所説を巡って－ 小島望（明治大学兼任講師）
	DoubRing：異文化の思考回路の多様性を定量化・可視化するための方法論 細谷功（オフィス134）
	市民の生存保障と換骨奪胎策の国際交流事業－ある行政職員（故人）の事業足跡から 石川孝樹
11：00～13：30	昼食・お弁当引き渡し (E301)
11：10～12：50	総会 第8回平野健一郎賞表彰式 文化交流創成コーディネーター資格表彰 (E301)
13：00～14：30	フォーラム (E301)
14：45～16：45	共通論題④～⑥
共通論題④ 日本への留学生と彼らのその後－中国・韓国・台湾の比較の観点から 代表者：加藤恵美 (E202)	
「韓国の事例」金香男（フェリス女学院大学教授）	
「中国の事例」鄭成（早稲田大学研究員）	
「台湾の事例」野口真広（早稲田大学研究員）	
「事例間の比較」加藤恵美（早稲田大学研究員）	
共通論題⑤ グローバル化する原爆の記憶とその諸相－「ヒロシマ・ナガサキ」の形成と展開 代表者：根本雅也 (E204)	
戦後被爆地の出発－平和都市ヒロシマと国際文化都市ナガサキ 桐谷多恵子（長崎大学核兵器廃絶研究センター・客員研究員）	
ヒロシマは国際化したのか－中国からのまなざし 楊子平（広島大学大学院総合科学研究科・外国人客員研究員）	
アメリカにおけるヒロシマ・ナガサキの「受容」根本雅也（日本学術振興会・特別研究員PD）	
グローバル・ヒバクシャからみるヒロシマ・ナガサキ－被爆者からヒバクシャへ 竹峰誠一郎（明星大学人文学部人間社会学科・准教授）	
共通論題⑥ 日欧比較文化再考 代表者：松居竜五 (E206)	
近代における日本とヨーロッパの相互イメージの変遷 松居竜五（龍谷大学国際学部教授）	
沼正三『家畜人ヤパー』とその読解 シルヴァン・カルドネル（龍谷大学国際学部教授）	
ベルギーのBD（バンド・デシネ）における日本人イメージ 杉本バウエンス・ジェシカ（龍谷大学国際学部准教授）	
日本における白人移民の現在 ミロシュ・デブナル（龍谷大学国際学部専任講師）	

国境を超える「戦争の記憶」をどのようにとらえるか

日本学術振興会特別研究員(PD)／立命館大学
根本 雅也

国境を超える「戦争の記憶」をどのように捉えればよいのか。これが日本国際文化学会に参加した私の動機です。

原爆の記憶に関心を持っていた私は、もともと広島と日本国内に焦点を当てていました。1945年8月6日に広島に投下された原爆の災禍が地域においてどのように位置づけられてきたのかを広島市行政や社会運動に着目して歴史的に辿るとともに、原爆を体験した被爆者への聞きとりをしてきました。そのような折、アメリカで在外研究をしていた私は日系人もいない小さなコミュニティにおいて、原爆の追悼行事が長年行われてきたことを知りました。よくよく考えてみると、ヒロシマ・ナガサキはホロコーストと同様に人類にとっての「負の遺産」として世界各地で知られています。原爆を投下した国であるアメリカである種の「受容」がなされていたことに驚きを覚えるとともに興味深く思い、新たにアメリカやその他の地域でヒロシマ・ナガサキがどのように捉えられているのかを調査し始めました。

国を超えて異なる文化において、どのように原爆の災禍が位置づけられ、語られるのか。そして、それを調査研究するにはどのようにしたらよいか。グローバルに展開する文化現象へのアプローチを模索している中で、日本国際文化学会の名前を発見しました。国と国ではなく、文化と文化に着目し、学際的なアプローチも掲げる本学会であれば、私自身が学ぶことは多いのではないかと思い、参加させていただきました。実際にこのたびの第17回全国大会では、共通論題としてパネルを提案させていただいております。初めての大会参加となるのですが、皆様から色々とご意見をいただけることを楽しみにしています。

さて、新しく日本国際文化学会に参加したばかりの身で学会への期待を述べるのは大変おこがましいのですが、本学会を通じて私自身が学びたいことが大きく二つあります。ひとつは、国際文化学という学際的な研究の強みについてです。設立



趣意書の中には、「急速な国際化の中での文化現象の研究・教育のあり方を考える枠組み」としての国際文化学、そして「学際的な研究・教育のための議論の受け皿」としての日本国際文化学会の設立といったことが記されています。若手の研究者のひとりとして自身のディシプリンを問われることが多い中で、あらためてディシプリンを超えて、学際的調査・研究の意義とは何かを考え始めています。

もうひとつは、国際化する教育現場の中での教育の方法——ペダゴジー——です。私が研究の対象とするような戦争の記憶は、通常、国によってその歴史観が異なり、それはしばしば対立を生んでいます。様々な国からの留学生が集まる教室においてそのような戦争の歴史をどう教えることができるのか。どのような実践方法があるのか。そのようなことに関心を持っています。これらについて日本国際文化学会で考える場があればぜひ学ばせていただきたいと思っています。

最後に、日本国際文化学会に関わって間もない私に貴重な紙幅を割いていただきましたこと深く御礼申し上げます。また、ぜひ今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願ひ申し上げます。

—日中文化交流の使者を目指して—

多摩大学非常勤講師 王 媛

日本を知りたい。日本人を知りたい。そして、日本人に知ってもらいたい。これは、私が西安で在学していた高校と姉妹提携を結んでいる千葉県立幕張総合高校の生徒同士で交流を行ったときに、英語の単語を絞り出すことよりも切実に願つたことです。「自己流英語」と漢字を駆使し、チョークやペンなどの道具を使い、あらゆるジェスチャーを用いて自分の思いを伝えようとする10代の若者で溢れる教室は情熱に満ちていました。二十数年前の時間を止めたように今でも私の脳裏に鮮明な印象が残っているこの国際交流は、私にとってははじめてのものでした。

もっとも衝撃とも言えるほど忘れられないのは、「日本人＝桜」というメモでした。華やかな牡丹も清らかな蓮の花も、中国の文化的・精神的基盤を象徴する花ではありますが、中国人を花にたとえれば何になるのでしょうか。決して桜ではないとまさに答えた自分がいました。同じ漢字文化圏の日本人はなぜ桜を、桜だけを自分たちの象徴として強いイメージを持っているのでしょうか。この謎を解き明かしたい気持ちは私の日中文化交流研究を始めた契機であり、原動力であります。

日中文化交流の研究は、日本と中国の相互理解を促進することに貢献できると考えています。その際に、日本文化・中国文化の様相と本質、両者の共通点と異同などを明らかにすることは重要です。さらに、自国民のみならず、他者からどのように捉えられているのかということも自国への認識を深める不可欠なプロセスだと常々思っています。たとえば、「日本人から見た日本文化」だけでなく、視点を変えて「中国人から見た日本文化」も視野に入れれば、「日本文化」という対象についての認識を多角化して、その重層性をより浮き彫りにすることができます。中国文化においても同様で、「中国人から見た中国文化」と「日本人から見た中国文化」の異同や関係性を考察すること



とは古代から連綿と続く日中文化交流の全容を知る手がかりになると考えます。

そこで、博士論文では音楽を切り口に、日本の楽書『教訓抄』における中国関連の音楽説話を研究対象として、中国における伝承と日本における受容のあり方を比較し、中国古代の音楽文化のいかなる部分が中世日本において受容され、さらに独自の展開を遂げていくに至ったかを検討しました。今後も、古代中世以来の日中文化交流を通じて、私たちは「どこから来てどこへ向かうのか」「どのように自分を捉えて、周りの民族を認識したまでは認識してきたのか」など、現在のわれわれの根底にも流れる思想をさまざまな角度から明らかにしていきたいと思います。

日本国際文化学会に参加させていただいて、これほど多様な分野で活躍している方々のご研究にひとつの場所で接することができ、研究者・教育者としての自分自身の問題関心を磨く場に出会えたことに本当に感謝しております。この場を通じてさまざまな視点を持つ方々に刺激され、より広い視野で研究を進めて、「日中文化交流の使者」としての役目を果たせるように、また一会员として日本国際文化学会の発展に貢献できるように精一杯努力してまいりたいと思います。

●開催日時： 2018年7月7日(土)～8日(日)

●大会会場： 多摩大学 湘南キャンパス(グローバルスタディーズ学部)

〒252-0805 神奈川県藤沢市円行802番地 TEL: 0455-82-4141(代表)

●最寄り駅: 湘南台駅

小田急江ノ島線、相模鉄道いずみ野線、
横浜市営地下鉄ブルーライン

●電車利用案内

●小田急江ノ島線

- ・新宿→湘南台(50分)
- ・町田→湘南台(20分)

●JR横浜線・小田急江ノ島線

- ・八王子→湘南台(45分)

●相模鉄道いずみ野線

- ・横浜→湘南台(30分)

●送迎バス

全国大会の期間中、湘南台駅と多摩大学の間に
送迎バスを運行いたします。

※湘南台駅(西口)発→多摩大学行
(土) 09:00～11:00 (20分間隔)
(日) 08:00～10:00 (同上)

※多摩大学発→湘南台駅(西口)行
(土) 17:00～19:45 (20分間隔)
(日) 14:00～17:00 (同上)

※湘南台駅西口(出入口D)の「みずほ銀行」付近にて
スタッフが待機しています。

※詳細な時刻表は、決定次第日本国際文化学会の
ウェブページに掲示いたします。

●アクセスガイド

<https://www.tama.ac.jp/info/guide.html>

大会参加申し込み要領

●大会参加費

・一般会員	2,000円 (当日 2,500円)
・一般非会員	3,000円 (当日 3,500円)
・院生・学生	1,000円 (当日 1,500円)

●大会参加申し込み

※事前申し込み: 学会ウェブサイト、あるいはEメールにて大会実行
委員会(下記参照)までお願いします。Eメールの場合は学会メー
リングリストで送付するお申し込みフォームをご利用ください。
※郵送でのお申込みをご希望の際は、申し込みフォームを
大会実行委員会宛てにご郵送ください。

事前申し込み 締切 6月22日(金)

●大会参加費等の振込

※参加費用は、下記の全国大会用口座にお振込みをお願いします。
振込手数料はご負担願います。

【ゆうちょ銀行(郵便局)でのお振込】
ゆうちょ総合口座 10230-273101
口座名義 安田震一(ヤスダ シンイチ)

【別の銀行等の金融機関からお振込】
ゆうちょ銀行〇二八店(ゼロ二ハチ店)
普通 0027310 ヤスダ シンイチ

※年会費支払い用の「振込用紙」は大会参加費の振り込みには
使用できません。

※振込後のキャンセル等は、個別に大会実行委員会にメールなど
でご相談ください。

●お弁当代(お茶付き)

- ・7月7日(土) 1,000円
- ・7月8日(日) 1,000円

※当日は学生食堂は営業しておりません。
また大学周辺には飲食店が少ないため、
お弁当での予約をお勧めします。

●エクスカーション(7月6日) 参加費

- ・一般・院生・学生 1,500円

●宿泊先

・湘南台駅に隣接しており、多摩大学まで徒歩圏内のホテルは次の2件です。各自でご予約をお願いします。

湘南台第一ホテル 藤沢市湘南台2-3-10 (TEL:0466-45-7200)
相鉄フレッサイン 藤沢湘南台 藤沢市湘南台2-12-6 (TEL:0466-41-2031)

・小田急・JR藤沢駅近辺のホテルです。湘南台駅から藤沢駅までは約10分・190円(小田急江ノ島線・各駅停車)。

相鉄フレッサイン 藤沢駅南口 藤沢市南藤沢22-17 (TEL:0466-99-0203)
ホテルレーリングインターナショナル湘南藤沢 藤沢市藤沢109-5 (TEL:0466-55-1112)
東横INN湘南鎌倉藤沢駅北口 藤沢市藤沢515-1 (TEL:0466-53-1045)
ホテル法華クラブ湘南藤沢 藤沢市鵠沼石上1-6-1 (TEL: 0466-27-6101)

エクスカーションのご案内

●テーマ： 横須賀で「知の再武装」の意味を考える

横須賀は「知の再武装一人は何をするべきか」という本大会のテーマを考えるヒントに溢れています。本エクスカーションでは、徳川家康の外交顧問として活躍し、江戸初期の日本人の世界認識に「知の再武装」を促した三浦按針(ウィリアム・アダムス、1564-1620年)ゆかりの地を訪ねます。

また、横須賀製鉄所(後の横須賀海軍工廠)の建設を指導するなど、日本の近代化に大きな足跡を残したフランス人技師ヴェルニー(1837-1908年)の記念館を訪ねます。西洋列強に追いつくため、日本は旧弊を捨てて「知の再武装」に国を挙げて挑みました。しかし、日清・日露戦争を経て、アジアの盟主を自認した日本は、やがて西洋列強に挑み、ついには大きな犠牲を払うという「知の再武装」と対極のルートを歩むに至ります。

戦後日本は日米同盟を基軸とした軌跡を歩みました。しかし今、グローバル世界の激変は、新たな「知の再武装」を日本人に求めています。横須賀では日露戦争の連合艦隊旗艦「三笠」を訪ね、船上から米海軍の基地を視察します。これにより戦前と戦後日本の歩みを踏み固め、将来に向けた「知の再武装」を議論する場に致したく存じます。

- 開催日時： 2018年7月6日(金)
- 集合場所： 京急横須賀中央駅 東口改札口前 12:30集合(厳守)
- 申し込み： 6月22日(金)までに大会実行委員会宛てにメール(2018jsics@gr.tama.ac.jp)
- 参加費： 1,500円(大会参加費と一緒に振込みください)
- 募集人数： 23名(先着順)
- 企画協力： 横須賀市

時間	プログラム(※変更の可能性あり)
12:30	参加者集合(京急横須賀中央駅 東口改札口前)
13:00-13:30	ヴェルニー記念館見学(学芸員の解説付き)
14:00-14:45	軍港めぐり
15:20-15:30	三浦安針墓(塚山公園)
15:45-16:15	浄土寺見学(ご住職による説明)
16:30-17:30	記念艦「三笠」見学
17:40	京急横須賀中央駅付近にて解散(希望者はポートマーケット見学)

(荒天時) ・軍港めぐり欠航時→代わりに横須賀市自然・人文博物館を見学(1時間程度)